

「第 11 回 モンゴル国立科学技術大学主催 日本語スピーチコンテスト」

2012 年 11 月 3 日(土)午前 10 時から、モンゴル科学技術大学校舎にて、2012 年 第 11 回 日本語スピーチコンテストが開催されました。主催者側代表として、初めに科学技術大学 言語教育学部長のご挨拶がありました。今年は、日本・モンゴル外国関係が樹立されて 40 周年の節目の年に行われる大会であり、盛大に行われました。



[後援/審査]

在モンゴル日本国大使館、国際交流基金、JICA モンゴル事務所、モンゴル・日本人材開発センターモンゴル人日本語教師

予選の段階で、5つの大学8学部から61名が筆記試験と作文に挑み、10名が選抜されました。10名中6名が国立モンゴル大学名古屋大学日本法教育コースの学生が占めました。5年生が1名、4年生が1名、3年生が3名、そして2年生が1名という内訳でした。残りの出場者4名は、科学技術大学言語教育学部から3名、国立教育大学外国語学部から1名という構成でした。

スピーチは南極料理人という邦画をみて、「心に残ったエピソード」というテーマで行うよう指示が出ました。スピーチまでに残された期間は2週間、この間に、各自、タイトルを決め作文を書き見直し、さらに清書しては、構想を練り直し、同時に発音やイントネーション、視線やお辞儀の練習も同時に行うという目が回るような忙しさでした。むろん、学生たちは自分の学部や日本法の授業と課題をこなしながらの作業のため、最終稿が固まったのは、スピーチの前夜9時過ぎでした。

3日は快晴、最高気温-6度、最低気温-16度という吐く息も凍る冷たい朝を迎えました。前日遅くまで練習していたのか、眠そうな顔の日本法の学生を含む10人のスピーカーは、次々に壇上に上がり、練習の成果を披露しました。すべての発表が終わった後、しばらく

科学技術大学の学生によるミニコンサートや伝統的な舞踊などが披露され、いよいよ審査結果が発表されました。初めに奨励賞として国立教育大学の S.アマルバヤスガランさんの名が呼ばれ、続けて三位から一位の発表となりました。受賞者の氏名とスピーチのタイトルは次のとおりです。

日本法センターの学生が一位から三位を独占！



第1位：写真中央

S. スフチョローン(4年生)「母が作った料理とミルク茶」

第2位：写真右側

S. モロム(3年生)「ポジティブな考え方はいい結果になる」

第3位：写真左側

N. ゴルジャルガル(5年生)「家族の中の父親の位置」

受賞者には賞状とともに、上位順にネットブック、電子辞書、和蒙辞典、奨励賞には漢和辞典が贈られました。そして、全員に参加賞が授与されました。

片桐準二氏(国際交流基金日本語上級専門家)の総評は、「今回の出場者はレベルが高く、発音や文法がしっかりしていた。とくに難しい単語を上手に使っていた」。続けて、「課題の映画は内容が単調なので、映画そのもののテーマを見つけるのは難しかったのではなかったか。第11回出場者が扱ったのは、人とどのように関係を築くか、夢、日モの料理の比較であったが、もっと他の解釈もあってよかったのではないかと思う。また、受賞者を選定するにあたっては、先ずテーマが絞られていて、そのテーマとスピーチの内容がぶれていないこと。次に具体的なエピソードがうまく描写されていること。これら二つの要件が揃っていることが選ぶ基準となった。」と評された。



応援にかけつけた学生と先生

(写真撮影 常勤日本語講師月川純子・ダワーニャム5年生)